要旨

本博士論文は、ネパールのネワール社会で伝統的に行われている初潮儀礼（バーラ・タエグ）が、出家儀礼（リシニ・プラブラジャー）に代わるという近年の変化に着目し、フィールドワークに基づいて、現代ネワール社会における少女の儀礼実践に関する宗教人類学的研究を行うものである。本研究における大きな「問い」は、ネワール社会における女性の地位の変化は、女性の儀礼実践にどのような影響をもたらしたのかというものである。特に、成熟期の女性の儀礼は、女性の身体の成熟や生殖能力、結婚といったジェンダーの問題と強くかかわっており、南アジア研究においては、親族関係やカーストといった社会的要因は、女性の位置付けや意味づけを規定するものと捉えられてきた。

宗教人類学における成人儀礼研究においては、儀礼は社会的に意味づけられるものというように、社会性に焦点がおかれ、儀礼が個人的な目的や意図の上で行われているという視点が欠けていた。人類学的ジェンダー研究でも、社会の措定は一義的な儀礼理解につながり、共同性や単独性という視点における相互干渉的な場として儀礼を捉える視座の必要性が明らかである。仏教学における成人儀礼の研究においては、大乗仏教の儀軌研究のように、限定化された領域で儀礼を捉えることは、政治や社会的変化、さらに、「近代仏教運動」のような新たな動きによる相互関係を見落としてしまうことにつながる。仏教学における教義研究において、新しい動きとしての《テーラヴァーダ》が見落とされてきた点も、系譜的な仏教の限定的な領域化によるものであると指摘できる。

また、ネワールにかかわる民族誌的研究においては、カーストという視点が社会を規定する大きな要因となってきた。ネワールの初潮儀礼は、社会的な性という点と、儀礼による状態の段階的変化という点で、多くの南アジアの儀礼研究と類似性がみられる。儀礼は少女が女性という段階へ移行することを意味し、「（社会的に成人した）女性」という意味づけによって社会的性の変化を認識させる。また、神との結婚による既婚性の付与によって、寡婦という状態の不吉さが認識される。しかし、一方で、以下の課題が明らかになる。それは、社会的認知を可能にする状況は、儀礼を行うカーストの生まれであること、そして、異なるカースト間のインターカーストによる結婚などがなく、十全な親族の状態であることが前提とされている点である。要するに、これらの研究はカーストを前提とした社会を想定しており、その社会範疇に当てはまらない人々の実践が対象化されないという問題がおこる。さらに、カースト社会を前提とした研究では、カーストに即した慣習に多く焦点が当てられており、個人による選択的行為が、社会という枠組みの中で見えなくなっ

てしまうのである。

これらの先行研究をふまえ、本研究は、ネワール社会の密教儀軌に基づく初潮儀礼が《テーラヴァーダ》の出家儀礼に代替するという事例を分析することで、社会的意味づけだけでは捉えきれない、個人の主体性について論じ、儀礼受容が社会的な上昇や、付加価値をつけることにつながるという視点を提供する。

結論として、親族関係と強く結びつくバーラ・タエグが、リシニ・プラブラジャーになることは、親族関係にかかわる実践の変化と捉えられる。伝統社会において、親族関係は重要なものと捉えられてきたが、儀礼に個人の志向が強く表れるようになり、より狭い範疇の家族や、個人的な行為として捉えられはじめていると言える。リシニ・プラブラジャーでは、費用・時間にかかわる経済合理的な理由のほか、親族関係における不都合や、インターカースト婚、国際結婚などの個人の社会状況に対して解決策を提供することができる。さらに、儀礼が道徳的意味を持つことで、そこに教育という価値が付与される。また、儀礼への志向は、ヒンドゥー教や仏教という認識に従って行われているというよりも、具体的な慣習に対する個人的志向によって選択されているといえる。しかしながら、一方でリシニ・プラブラジャーが《テーラヴァーダ》であるという点は、ネワール社会において特別な意味を持つ。《テーラヴァーダ》の普及によって、パーリ語の経典を、学習（読む）ができるようになったことは、それまでのネワール社会でカーストという壁によって接することができなかった書物としての経典（三蔵）の学習が、他のすべてのカーストに解放されたことを意味する。この読む・書くといった教育は、ネパールにおける教育制度の整備によって、学校教育における方法や思考と類似するようになった。このようなテクストベースの教育は、ネワール社会における人生儀礼に対する観念にも影響すると考えられる。ネワール社会における女性の地位の変化は、社会的に「成人」したと認識されるような、個人への受動的な意味づけという機能だけでなく、自ら、どの儀礼を選択するかという主体的な行為によって、「教育」や育ちをよく示すという能動的な意味づけを与える儀礼実践に変化をもたらしている。

論文審査結果の要旨および担当者

提　　出　　者	工藤　さくら
論文審査担当者	（主査）教授　　木村敏明 教授　　沼崎一郎 准教授　谷山洋三 准教授　山田仁史 京都大学人文科学研究所教授　田中雅一
論　　文　　名	現代ネワール社会における初潮儀礼と≪テーラヴァーダ≫

本研究は、現代ネパールのネワール社会を対象とし、伝統的初潮儀礼の代替を事例としながら当該社会への≪テーラヴァーダ≫の影響とその変化を分析することを課題としている。

序章では世界的な「近代仏教運動」の動向が紹介されたのち、その運動が民衆の実際の生活与えた影響について解明することが本研究の課題として示される。本論は大きく二部構成をとる。第一部「ネパールにおける『宗教』概念の動向」ではネパールにおける「近代仏教運動」の動向を歴史的背景と共に概観する。まず第一章「『近代仏教』と『近代仏教運動』」および第二章「現代ネパールのダルマをめぐる展開」において背景となる近代仏教運動とネパールの政治的文脈を整理したのち、第三章「ネパールの仏教と『近代仏教運動』」において、同国で≪テーラヴァーダ≫が「近代仏教運動」を体現する存在となっていることが示される。第四章「ビクニによるダルマの再解釈『教養としてのダルマ』」ではネパールにおける≪テーラヴァーダ≫の活動の中でも特に女性の地位向上やビクニサンガの確立に尽力してきたダンマワティ尼僧による経典の読み直し／読み替えに焦点をあて、その意義が考察される。以上をふまえ第二部「儀礼分析：ネワール族の事例」ではネワールの初潮儀礼の事例が検討される。まず第五章「ネワール族と≪テーラヴァーダ≫」でネワール社会、第六章「伝統儀礼の社会性」でそこに見られる儀礼の特徴を概観したのち、第七章「初潮と成人」においては初潮儀礼に焦点をあて、儀礼書を用いながらその意義や構造を明らかにする。第八章「儀礼の置き換え：初潮儀礼と出家儀礼」は≪テーラヴァーダ≫によって伝統的初潮儀礼の代替として提供されているリシニ・プラブラジャー儀礼について詳細な民族誌的記述とその背景の考察がなされる。そして第九章「人生儀礼への志向：学位(degree)としての儀礼」では、その新たに導入された初潮儀礼の意義を「学位としての儀礼」という概念を導入しながらまとめている。

これまでのネパール仏教の研究は伝統的なネワール仏教に偏り、≪テーラヴァーダ≫の影響やその意義に関する考察は十分になされてこなかった。本研究は「近代仏教運動」としてのその特質と意義を具体的な儀礼の事例の分析を通して明らかにしている。その成果は今後のネパール宗教研究の重要な基盤となるものであり、高く評価できる。よって本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与するに十分な資格を有するものと認められる。